

## 空の涙

リン オイイン

子供の時、私は雨が嫌いでした。外で遊べないし、濡れた服もめんどくさいし。何よりも、灰色の空は悲しいと思いました。昔、私は「なんで雨が降る？」と聞きました。おばあちゃんは「雨は神様の涙だよ」と言っていました。

でも、私は大きくなって、雨が好きになりました。私の全部はもう雨の日みたい灰色になりましたから。「ばあちゃんが嘘ついた。世界にあるのは絶望だけ。」作ったてる坊主を捨てました。夢や希望といったものは眩しすぎたので、全部諦めました。胸が苦しすぎたので、感情を殺しました。友達も家族も私を理解できなかつたので、雨は唯一の友達になりました。稲妻は心臓の中のひびで、雨は私と一緒に泣いている空の涙でした。

ある雨の深夜、私は家を出かけました。傘や鍵やスマホを持っていませんでした。一人で暗い道を歩いて、頭の中の雲は消えなくて、服や顔は濡れました。「ね、雨？私どうしたらいいの？この人生もう疲れた…」突然、私は矛盾したことに気づいて、笑いしました。雨は水で、水は生命の起源です。でも、そんな物に安らぎを探している人は「残酷な世界が大嫌い、もう生きていたくない」と言った人間でした。皮肉だと思いませんか。

私はもう一度笑って、泣きました。「これは私の『生きたい』かも？」聞いた答えは風音だけでしたが、雨は皮膚に優しく落ちて、心の中の嵐を徐々に静めました。「帰ろうっか。」寒さで少し震えて、私は家路に着きました。